

# イエス研究のルネサンス (II)

—二つの国際学会から—

山内 一郎

## The 1994 Meeting of the STUDIORUM NOVI TESTAMENTI SOCIETAS

第49回国際新約聖書学会が去る8月1日～5日に亙り、スコットランド・エディンバラ大学、ポロック・ホール・オブ・レジデンスを会場にして開催され、参加者は昨年を上回る約300名（さらに同伴夫人ら数十名）を数えた。エディンバラは城下町の風情のあるヨーロッパで一番美しい街と言われるが、実は1937年夏、当地で「信仰職制」に関するエキュメニカルな研究協議会が開催された際、さるレストランで、C・H・ドッド、ツワン、両マンソンなど10名の新約学者が昼食を共にし、同学の交わりを篤くして継続的な交流と研究成果の普及の必要性を語り合ったのが切掛けとなりSNTSが誕生したという、学会とは深い縁に結ばれた歴史的スポットでもある。日本からは今回、川村輝典氏（東京女子大学）、熊沢宣義氏（東京神学大学）、B・シュナイダー氏（フランシスコ会聖書研究所）と筆者の四人に加え、以前20年間上智、英知両大学で教鞭をとられたヨゼフ・ヘリバン神父（現ローマ教皇庁立サレジオ大学神学部）も参加され、会期中日本語の談笑が飛び交うという愉快的な体験もした。

5日間の主要プログラムは、例年通り、初日夕食後の総会議事第一部（M. Barth, O. Michel, G. Strecker, R. Fuller, C. K. Barrett ら逝去会員を追悼する黙禱、次期会長に Albert Vanhoye 教授、Pontificio Istituto Biblico, Roma を選出）から始まり、毎日朝食後の礼拝（Priestfield Church, Profs. K. P. Donfried, G. Ghiberti, G. Nebe 担当）、恒例の会長講演、そして研

## イエス研究のルネサンス（Ⅱ）

究発表（main paper 4, short paper 8）とテーマ別セミナー（各3回）という組み立て。

第二日目の朝、前任者M・ヘンゲル教授（Tübingen）の丁寧な紹介に続いて、P・ポコルニー会長（Prague）が、‘“From a Puppy to the Child”, Some Problems of Contemporary Exegesis Demonstrated from Mark 7. 24-30 par’ と題して一時間を越える Presidential Address を行った。はじめに、長い年月に亙り共産主義政権下でキリスト教の学問的研究にも様々な制約のあった状況から今日ようやく解放された喜びを語り、次いで近時における聖書学の方法論に関して、いわゆる diachronic（歴史のアナムネーシス - recollection）と synchronic（神学的洞察）のアプローチが本来対立的ではなくむしろ不可分の関係にあるゆえに、テキストの全体理解のために両者の eclectic integration が求められ、方法論がしばしばイデオロギーに変質するという陥穽を何としても避けなくてはならないことを強調した。本論の内容は、ポスト・イースターの見地から、異邦人伝道や非ユダヤ人キリスト者のユーカーリスト参加（intercommunion）問題を視野に入れて記されたマルコ7・24-30の克明な総合的検証で、「子犬」が「子供」になったというこの福音的ドラマが、パウロにおける「信仰義認」の使信を「物語」様式で提示する機能を担っていると結んだ。

メイン・ペーパーの発表者と題目は以下の通り。

1. T. Baarda (Amsterdam), ‘Notarion Exegesis in Paul?’
2. J. D. Kingsbury (Richmond, Virginia), ‘The Rhetoric of Comprehension in Matthew’s Gospel’
3. J. Schlosser, (Strassburg) ‘La figure de Dieu selon l’epitre aux Philippiens’
4. N. Walter (Jena), ‘Zur theologischen Problematik des christologischen “Schriftbeweises” im Neuen Testament’

アムステルダムのバアルダ教授による第一発表は、表題に疑問符を打つことによって、あくまでも一つの試論であることを断りながら、釈義の一方法としての Notarion (abbreviation) の意味と事例を旧約やミシュナーから数えあげた上で、特にロマ10・3－8（4節を除く）を申9・4、レビ18・5、申30・12、13、14（LXX、MTテキスト）と詳細に比較・検討することにより、パウロのキリスト証言における「ノタリコン」的釈義の可能性を示唆し、フロアーからもかなりの支持を得た。

リッチモンド・ユニオン神学校のキングスベリー教授による第二ペーパーは、マタイ福音書の Rhetorical analysis で、イエスを一切の権威の源としての神の終末論的生き証人 (ultimate eschatological agent) として提示する著者の動詞の好み (e. g. perceive, understand, behold, hear, receive, achieve, observe, do God's will, bear fruits etc.) から、読者をイエスの「教え」を通して招き寄せ、ついにイエスの「神」(インマヌエル) に対する正しい応答を促すに至る物語プロットの構造を解明するとともに、特に comprehension=cognition を主要動機とするこの福音書の literary strategy の積極的意図を鮮明に浮かび上がらせた。スケールの大きな内容だけにさまざまな論議を呼んだが、「共時的」アプローチの評価がなお定まらないという印象を拭い得ない。

Prof. Jacques Schollosser は、フィリピ1・6、11、2・11（ロマ14・11、15・7をも参照）、2・12-13のテキストを中心にこの書簡におけるパウロの神論とキリスト論の関係を論じ、またプログラムの最後に組まれた Prof. Nikolaus Walter のペーパーは、「イスラエルの神」と「イエス・キリストの父なる神」の同一性を前提として、改めて新約における旧約引用（解釈）の神学的機能を問い、これをキリスト論的「成就引用」として排他的に主張することに疑義を挟んだ。何れもユダヤ教とキリスト教の新しい対話を志向する現今の神学的潮流を反映する発表とも受け取られた。

ショート・ペーパーとしては以下例記8名の発表があった。

イエス研究のルネサンス (II)

Plenary session:

H. Lichtenberger (Tübingen), 'Alter Bund und Neuer Bund-Abstract und Gliederung'

J. I. H. McDonald (Edinburgh), 'The So-called pericope de adultera'

Simultaneous session:

S. Brown (Toronto), 'Archetypal Imagery in the Gospel of Truth'

U. C. van Wahlde (Chicago) 'The Relationships between Pharisees and Chief Priests: Some Observations on the Text in Matthew, John and Josephus'

H. Frankenmölle (Paderborn), 'Johannes der Täufer und Jesus im Matthäusevangelium: Jesus als Nachfolger des Täufers'

F. G. Dowing (Bolton), 'A Cynic Preparation for Paul's Gospel for Jew and Greek, Slave and Free, Male and Female'

D. Mossner (Decatur), 'The "Script" of the Scripture in the Acts of the Apostles: Suffering as God's "Way" for the "Release of Sins"'

D. Wenham (Oxford), 'Johannine Tradition in Paul?'

最近 *Cynics and Christian Origins* (Edinburgh, T&T Clark, 1992) を著したダウイングのキニク派とパウロをめぐる発表など注目を惹くペーパーが少なくなかったが、内容の詳細については学会誌 *New Testament Studies* 他を参照されたい。

プログラムのもう一つの柱であるセミナーは、参加者がそれぞれの専門領域で対論を重ねることのできる貴重な共同研究の場であり、今回は新たに、*The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (コーディネーター Profs. J. H. Charlesworth and H. Lichtenberger), *The Greco-Roman Context of*

Christian Origins (Profs. D. L. Balch and H. C. Kee), Textual Criticism (Profs. T. Baarda and J. Delobel) の3セミナーを加え、17の問題別グループに分かれ、毎日午前の2時間、三回行われた。筆者は初日「マタイ福音書」に参加、第二日以降は「史的イエス」の分科会にスイッチした。

マタイ・グループ (コディネーター Profs. R. Fieldmeier and D. A. Hagner) では 'Die Bedeutung des Todes Jesus im Matthäusevangelium' (Prof. W. Kraus), 'Conflicts of Kingdoms in Matthew: Social History, Source Analysis and Structure' (Prof. M. E. Boring) の2ペーパーが用意された。先ずクラウス教授は、マタイにおけるイエスの「十字架の死」が、マルコの場合と異なり、必ずしも唯一の中心主題ではなく、この福音書の1-4章および28・16-20を Schlusstexte とする「イエス物語」 (Jesusgeschichte) 全体の枠組みの中に位置付けられ、しかもその意味が、マタイ教団の内と外、二つのフロントを目したイエスにおける(1)インマヌエルと従順の帰結 (1・23、28・20、26・36-46)、(2)贖罪 (26・28)?、(3)イスラエルとの訣別 (26-28章の編集部分)、(4)終末論的出来事の始め (27・46-54の Modifikationen)?、(5)神の子たる確証 (16・16、26・63、27・54)、(6)使信の実現と弟子の模範 (4・4b、6・10b、17-25、26-33、26・39、42、28・16-20) などさまざまな位相を合わせ包攝するという理解を示した。共同討議の中では、神の愛子の十字架死というユダヤ人キリスト者にとっての本質的躓きにもかかわらず、何故マルコ10・45の *lytron* モチーフがマタイに欠落しているかをめぐって興味深い議論が交わされた。

次いで、テキサス・ブライト神学校のボーリング教授は、元来Q資料に依拠したメッセンジャーによって50年代に形成されたマタイ教団が、70年以降成立したマルコ資料の神の子「キリスト」告白の基本線を摂取する一方で、ベルゼブル論争に象徴されるヤムニアとの競合関係のなかで、律法解釈者としての教師「イエス」の働きとそのメッセージを再提示しなくてはならなかった状況を想定した上で、マタイ福音書全体のユニット構成を検討し直した。細かい点では種々異論もあろうが、従来の資料批判、社会史的分析、文学的構造分析など

## イエス研究のルネサンス（II）

多様な方法論を一点に集中させ組み合わせることによって、流れるような文脈の整合性を明らかにしようとする発表者の意図については肯定的なコンセンサスが得られた。マタイ・セミナーでは、なお未決の問題が多いゆえ、今後少なくとも2～3年は継続することが申し合わされた。

さて、第七分科会「史的イエス」のセミナーは、Renaissance in Jesus Studies と呼ばれるような現今の学会動向を反映してか、参加者二十数名という大人数に膨れ上がったが、H・D・ベッツ（シカゴ）、E・P・サンダース（デューク）の両教授がコーディネーターをつとめ、以下列記の2ペーパーが準備された。

Sean Freyne (Trinity College, Dublin), 'Jesus and the urban culture of Galilee'

Douglas R. Edwards (University of Puget Sound), 'Jesus and the landscape of Galilee: Assessing the archaeological evidence'

エドワーズ教授は、すでに福音書、ヨセフスなどを基礎資料とする文献学、神学のパラダイム支配に加えて、古代史、古典学、人類学、社会学、心理学など関連諸学との折衝が聖書学一般に要請されて久しいが、ことにイエス研究に関して考古学上の検証とその成果が重要な役割を果たすことを強調した上で、自ら携わった過去7～8年に亘る発掘調査に基づく興味深い報告を行った。

イエスが地上の生涯の殆どを過ごしたヘロデ・アンティパス治下（ルカ23・7）のガリラヤは、パレスチナ北部に位置し、ヨセフスによってアムド川を境に上部と下部に区別され（『戦記』39・9）、従来とも肥沃な平野という自然環境のゆえに農業の盛んな田園地方であったというイメージが強いが（cf. Ernest Renan）、最近までの考古学的データ（コンピューター処理により早く正確なデータが得られる）によれば、(1)当時ヘレニズム化の進んでいたヨルダン川東岸のデカポリス地方と同一の農耕器具が見出され、両岸の文化的交流が容易であった。(2)都市部で使用されたティルスの硬貨が郡部の農村でも発見され、税制も含めた経済的ネットワークがガリラヤ全土に作り上げられてい

た、(3)道路システムもかなり整備され、セッフォリス、ティベリウス両都市との往来が自由であったなどの諸点がほぼ明らかであるという論拠に基づいて、ガリラヤ地方における都市と農村の関係は想像以上に連系的であり、イエス運動が決して政治的、社会的、経済的、文化的に隔離、分断された辺境の真空地帯で展開されたのではないことを主張した。今後も精力的に進められる予定のヨタパタ、カファルナウム、セッフォリス、ベトサイダ、ケファル・ハナヤさらにメロン、ナブ・ラティン、グシュ・ハラブなど、上下ガリラヤ発掘プロジェクトの成果が注目される場所である (cf. D. Edwards, "The Socio-Economic and Cultural Ethos of the Lower Galilee in the First Century: Implications for the Jesus Movement," in, *The Galilee in Late Antiquity*, ed. by L. Levine, Harvard Univ. Press, 1992, pp.53-73; David A. Dorsey, *The Roads and Highways of Ancient Israel*, The John Hopkins Press, 1992, pp.54-55; 157-162)。

一方、ダブリンのフレイン教授は、考古学とイエス研究の学問的折衝が実質上未だ実らない例証として、たとえば最近大きな反響を呼んでいる J. D. Crossan, *The Historical Jesus, The Life of A Mediterranean Jewish Peasant*, Harper and Row, 1991 を挙げ、Mediterranean という規定が本来人類学的カテゴリーに属し、むしろ福音書テキストと直結するガリラヤの歴史的、地理的背景にスポットを当てる必要を説き、イエス時代 (マルコ以前、紀元30年前後) のガリラヤにおける周辺地域との交易や自由な往来 (マコ 7・24 f、31 f) など考古学的データに関するエドワーズ教授との共通理解を示した上で、確かにヘレニズム、ローマ時代のガリラヤがギリシャ風都市に囲まれ、「異邦人のガリラヤ」 (イザ 8・23、I マカ 5・15、マコ 4・15) と呼ばれても不思議はなかったが、しかも、(1)福音書はガリラヤ、サマリア、ユダヤなど地域区分を明記しながら、パレスチナにおける政治・経済・文化・社会の諸問題には殆ど関心を示さず、(2)ガリラヤの人々が納税を強いられ (マコ 12・13-17 参照)、市民権も無かったとは言え、イエスの生前、当地は比較的平穏であり、

## イエス研究のルネサンス (II)

(3) J.S.Kloppenborg (The Formation of Q, Fortress, 1987; “Literary Convention, Self-Evidence and the Social History of the Q People, “Early Christianity, Q and Jesus, Semeia, 55, 1991, pp. 77-102) らのQ伝承の分析 (early sapiential layer and later apocalyptic/judgement one) にもかかわらず、史的イエスとアポカリプシス(神の国思想)の関係は容易に否定され得ず (vs. B. Mack, The Lost Gospel. The Book of Q and Christian Origins, Harper, 1993)、したがって、(4)当時ギリシア・ローマ世界の都市圏知的エリートの中に流布していたと思われるストアのキニク派的理念とライフ・スタイルに Jewish peasant としてのイエスが範をとったというダウイングらのシナリオを退け、むしろ、E. P. Sanders, Jewish Law from Jesus to the Mishnah, SCM Press, 1990 とともに、農民の気風をもつ Jewishness の側面を強調し、ことに (5)イエスが予言者的精神を帯して、ガリラヤの全町村に浸透しはじめたヘロデ・アンティパスの権力支配や市場経済優先のエートスを批判した事実 (マコ10・42-45並行/同3・24、マタ12・25=ルカ11・17/マタ11・7-9=ルカ7・24-26=トマ78・1-3参照) を是認することによって、真のイスラエルの回復を志向したイエス運動の根本動機を明らかにし、合わせてヘロデー統が制するセッフォリスやティベリアスの都市への言及が殆ど見られないという謎を解明しようとした点が大方向の注意を惹いた。

第三日目の最終セッションでは、M・ヘンゲル、H・D・ベッツ、P・S・サンダース、H・アンダーソンらを中心に、福音書、ヨセフス、ラビ文献それぞれにおけるガリラヤへの関心の度合いと内容、および「市」「町」「村」規定の相違、考古学と聖書文献学の方法論の問題を含めた具体的折衝の方向、ユダヤ教学者との対話の可能性、死海写本、前共観伝承、黙示文学思想といった SNTS の隣接する関連セミナーとの情報交換の必要性など、今後の課題をめぐって議論は多岐にわたったが、来年度は W. Meeks, R. Riesner らを加え、クムラン (エッセネ) - バプテスマのヨハネ - イエスを結ぶ一線に則して共同研究を継続することを取り決めて散会した。

アカデミック・プログラムとは別に、夜は Ceilidh という珍しいスコット



ランド風の歌と踊りのアトラクション（プロローグが川村夫人とヘリバン神父の立派な二重唱、エピローグは元 BBC 宗教番組の担当者 I. M. Mackenzie 牧師によるクラシック音楽のピアノ弾き語り）、エディンバラ市と大学主催の歓迎レセプション（於国立美術館）と盛大な晩餐会（於 Playfair Library, Old College）という楽しくも優雅なエンターテイメントが盛られ、宿舎、会場の至便なこと、John McIntyre Center での豊かな食事、さらにスコットランド史の専門家（G. W. S. Barrow, V. Glenn 両教授）のガイドによる day-long excursion の企画など、New College の Profs. John O'Neil, Douglas Templeton をはじめ準備委員会の非常に行き届いた配慮によって学会は成功裡に終わった。第50回大会は、明年7月31日～8月4日、プラハ（チェコ）で開催の予定である。

## SBL Twelfth International Meeting-Colloquim Biblicum Lovaniense XKIII

SNTS エディンバラ大会に続いて、第12回 SBL (Society of Biblical Literature) 国際学会と今年で43回を数えるルーヴァン聖書学コロキアムの合同プログラムが、8月7-10日の4日間、ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学を主会場として開催され、ここには合わせて約400名（内半数以上はヨーロッパ、3割強が北米、他はアフリカ、イスラエル、環太平洋地域）の聖書学者が参加した。日本からは土屋 博（北大）、大串元亮（日本ルーテル神大）、小田島太郎（明学大）、B・シュナイダー（フランシスコ会聖書研究所）、小林義高（在フィリピン）の各氏と筆者の計6名で、アジアでは多数組となり、土屋氏が「日本における聖書受容の問題」と題し、小田島氏が「エレミヤ5章」、小林氏が「出エジプト20・5bの翻訳をめぐって」それぞれ研究報告を行った。

ブリュッセルから東南へ25kmのルーヴァンは、カトリックの伝統の深い学生町、1944年戦禍にみまわれたが、中世以来の美しい町並みが見事に再建されている。ルーヴァン大学は、法王 Martinus V によって1425年に創立され、エ

## イエス研究のルネサンス (II)

ラスムス、トーマス・モア、ヤンセニウス、メルカトルなどを輩出、現在フランス語圏最高学府の一つに数えられ、2万5千人の学生を擁する。町のいたるところに大学の建物が点在するが、学会は神学教育の拠点となっている Maria-Theresia College, Pauscollege を主会場とし、Opening Reception, Closing Banquet は壮麗な Jubileumzaal で催された。筆者はヨハネを含む福音書、それにコリント書簡を集中的に取り上げたコロキウムも合わせて20を超えるプレゼンテーションを聞いたが、ここでは前回のミュンスター大会に続いて、第一日目の午前、午後数時間に亘るロング・セッションとなったセミナー “The Historical Jesus: Conversations with John Dominic Crossan” における発題と共同討議の内容をスケッチし、若干コメントを加えることにしたい。

今日までに、「史的イエス」をめぐる論議はある意味で出尽くしたと思われるほどであるが、しかもキリスト「信仰」が歴史「批判」に対してもつ積極的な関係 (fides quarens intellectum) のゆえに、今なおとどまるところなく不断に新しく問い直され、あまつさえ1980年代以降は「イエス(伝)研究のルネサンス」、あるいはA. シュヴァイツァーの Von Reimarus zu Wrede: Eine Geschichte der Leben-Jesu-Forschung, 1906に集約される18世紀以来の “Old Quest”、様式史研究の帰結としての “No-Quest” 時代 (R. ブルトマン他)を潜り抜けた1950年代後半から1960年代にかけての “New Quest” (G. ボルンカム、J. M. ロビンソン他)の提唱を承けて The Third Quest of Historical Jesus とも称される新しい状況を生み出している。(『神学研究』41号所載の拙稿「イエス研究のルネサンス」参照)

80年代後半以降の「イエス研究」における一種の「パラダイム・シフト」については、今回もセッション全体のコーディネーターを務めた Marcus J. Borg 教授が up-to-date な解題 Jesus in Contemporary Scholarship, Trinity Press International, 1994を著したが、E. P. Sanders, Burton L. Mack, Elisabeth S. Fiorenza, Richard Horsley らに加えて、最も新しく重要な業績と目される John Dominic Crossan の大部の The Historical

Jesus: The Life of a Mediterranean Jewish Peasant, 1991がすでに数万部を頒布し大きな反響を呼び、最近そのコンパクト版 Jesus: A Revolutionary Biography, a cut-down version (“Baby Jesus”), 1994が出版されたこともあり、当のクロッサン教授がキー・スピーカーに選ばれたのである。デ・パウル大学で宗教学を担当する同教授は、すぐれたイエスの譬え研究 (In Parables: The Challenge of Historical Jesus, 1973) を著したブルトマニアンとして知られていたが、ボーク教授の紹介を受けて登壇したクロッサンはフリーハンドで臨み、眞卒に自己史を披瀝した上で参加者との自由な対話を試みた。

アイルランドの銀行家の家庭に生まれ育ったクロッサンは、カトリック系の boarding school に在学中、学問することに興味を覚え、パリッシュで教職につく意志はなかったが、学問僧の道を選択した。17才の時、宗派神学校である Lake Bluff Seminary に入学、1951年から6年間哲学と神学を学ぶ。その後ローマ、エルサレムに留学中、聖書学と考古学への開眼を与えられ、セミナリーで教鞭をとることになったが、第二ヴァチカン公会議の影響もあり、1969年、リベラリズムの旗印を掲げて神学校を去り、同年デ・パウル大学教授に就任。現在は神学教育から離れ、大学でキリスト教を学問的に探究する研究者として厚遇されている。以下はセミナーで交わされた問答の要点である。

#### (1) 新しい『イエス』を著した際の神学的前提について

父、子、聖霊のそれぞれの実在に超越的次元 (divine consistency) を認めることに吝かではないが、伝統的な三一論には与せず、地上のイエスをいきなり神人に見立てることをも退ける。よって福音書が伝える処女降誕、奇跡、復活についてこれを直解的に受け取ることはできない。クリスマスやイースターの物語、あるいは終末や体の魅りに関する黙示文学的表象などをリテラルに解さないで、メタファーとして読むからである。

#### (2) 「史的イエス」探究の方法論について

三つの異なる templates (規範・型・アプローチ) を設定する。第一は文

## イエス研究のルネサンス (II)

化人類学の領域で、イエス時代のパレスチナにおけるローマ帝国の政治、経済、社会の仕組みを精査し、当時農民層が、権力を握る富裕層 (aristocracy) によって土地を収奪され、「自給農民」 (subsistence farmers) から「小作人」 (tenant farmers) へ、さらには日雇い労働者に転落したという状況が推定できる。第二は歴史文献学の領域、例えば同時代のヨセフスの著作によって、山賊の出没など不穏な世相を垣間見ることができる。第三に、それらを踏まえキリスト教文書としての福音書テキストに向かうことによって、例えば「貧しい人たちは幸いである」というイエスの言葉が何を意味するかが明らかとなる。この三領域を一つに統合する重層 (ヒエラルキー) 的学際研究によって、クロッサンはブルトマンから抜け出ることが可能となったと声明する。

## (3) 学問的に再構成され得るイエス像について

イエスはユダヤ人の peasant アジテーターとして立ち現れ、虐げられた人々の苦しみや痛みを癒したヒューマンな聖徒の一人、徹底した平等主義者 (egalitarian) であった。あるいはまた、イエスはソクラテスのように人々に問いかけ、チャレンジを挑み、あらゆる階級、身分の壁を取り除き自由を高揚したキニク派の一人であったかも知れない。イエスのメッセージからも、「神の国」のヴィジョンが万人に開かれ、誰でもみな神の前で平等に問われ、招かれているという福音が聴き取られる。

## (4) イエス・セミナー (1985年以來、Robert Funk, Crossan をはじめ Kloppenborg, Fortna, Koester など200人を越える専門家を糾合し毎年2回開催されるワーク・ショップ) の成果 FIVE GOSPELS AND ONE JESUS – WHAT DID JESUS REALLY SAY ?1994 の評価について

確かにリスクな要素があり、テキストの authenticity に関する4段階評定もあくまで蓋然性の域を出ないが、一定の学問手続きを踏まえての専門家集団 (critical scholars) による共同作業 (数年間に亙り、トマスを含む5福音書から1500を数えるイエス語録を抽出し逐一検討) の成果である以上、やはり

無視し得ない参考資料となる。近く、イエスの行為・振舞いに関して同様の成果をまとめ公表したい。

午後、N. T. Wright (Lichfield Cathedral), Paula Fredriksen (Boston Univ.), John K. Riches (Univ. of Glasgow) らコメンテーターによる質疑に続く全体討議では、社会史的アプローチの功罪、イスラエルの捕囚からの解放とイエスの「神の国」運動 (新しいエクソダス) のアナログな関係、イエスにおけるアポカリプシス (神の勝利、復活)、キニク派の実態や学派の存在自体の有無 vs. Jewishness, scribe (rabbi) vs. peasant など多岐にわたる議論が交わされた。

次回ブタペストで開催予定の1995 International Meeting に向けて、James H. Charlesworth (Princeton) が “Origins of Jesus, Judaism and Early Christianity within a Social World” という統一テーマでシンポジウムを企画し、筆者にも Christian Mission の視点から発題の要請が届いている。

(1994. 12. 21)